

フィロソフィア - 5

今朝は連絡不行き届きで迷惑をかけてすみませんでした。また今日も授業がつぶれ、なんと来週は期末試験なので、二週間授業がない分をなんとか少しでもプリントで補いたいです。

紀元前6世紀にタレスによって始まったギリシア哲学は、わずか200年弱の間に長足の進歩を遂げて、ソクラテス、プラトン、アリストテレスによって完成されると言われます。特にプラトンは、彼以前の哲学者たちが立てた様々な問題を立て直して、解決を与えようとしていました。しかし、多くは未解決のまま残されました。それらを整理して一定の解決を与えたのが、プラトンの弟子のアリストテレスです。もちろん、哲学に完成はありませんし、彼も神様ではないので、多くの問題が未解決、あるいは誤った解答を出したこともあります。しかし、それにしても物事をすごく深く考えた人で、その後の西欧だけでなくアラブ世界にも大きな影響を与えました。ルネサンスのころ(14、15世紀)にひどい批判を受けて、近代には軽んじられることもありましたが、20世紀になって再び注目を浴びています。みんなには、アリストテレスの考えを聞いて、自分でそれが正しいかどうか判断して欲しいです。

さて、タレスは万物の根源を探して、哲学を始めましたが、それ以来、哲学者というものは、意見の違いはありますが、みな「なにか変わらないもの」を探していたと言えるでしょう。ただ、ヘラクレイトスという人は「すべては変化する(パンタレイ)」と言って、変わらないものがあることを認めませんでした。パルメニデスが「真の存在は唯一、不変、永遠である」と主張してからは、「不変なもの」を探しながら、同時にその「不変なもの」が組み合わさったりして変化と多様性が生じるのだという説明するようになりました。こうして、四元素説(エンペドクレス)や原子論(デモクリトス)などが出てきたのです。

しかし、こういった真理を探そうという傾向はソフィストと言われる人たちによって変更されます。ソフィストたちにとっては、「真理とは何か」よりも「どうやったら弁論で相手に勝つことができ、政治の世界で成功することができるか」が重要で、そのためには、「黒を白と強弁すること」も躊躇しなかった。これに対して異を唱えたのがソクラテス。「お金や地位や名誉のためではなく、魂を磨け」と訴え、「本当のものをさがそう」と賢者と言われる人たちとたえず問答して、結局死刑に処せられました。このソクラテスの言う「本当のもの」とは何でしょうか。それは今流に言えば、定義と言えます。

ソクラテスはある勇猛な将軍に「勇気とは何か」と問います。将軍は自信満々に「戦列に踏みとどまって敵を防ぎ、逃げようとしなければ、その人は勇敢な人なのだ」と答える。これは誤りではありませんが、ソクラテスは「でも騎馬同士の戦いなら、あちこちに逃げて敵を幻惑して戦うではないか。また海難事故や病気や貧乏に際して、・・欲望や快樂に対しても立派に戦うことの出来る人にも共通する『勇敢に戦う』とはどんなことか」と問い返すのです。つまり、一つの具体的例を挙げてする説明では満足せず、あらゆるケースに当てはまる勇気の定義を探したのです。こういう定義を知っていることが、真にものを知っていることだと言うのです。そうして「真理とは何か、善とは何か、美とは何か」とどんどん進んでいったのです。

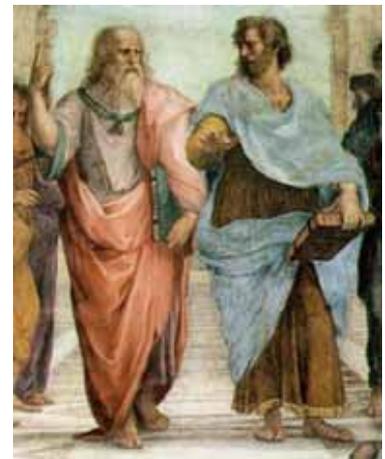
ソクラテスは非業の死を告げますが、その精神は彼の弟子プラトンに引き継がれます。そして、プラトンは物事の定義に当たる「ものそのもの」は、イデアというものだと言いました。つまり、「勇気そのもの」とか「真理そのもの」というものが存在するとしたのです。実際に目に見える人々には、完璧に勇敢な人はいませんが、完全な勇気である「勇気のイデア」はあるのだ、と。また、実際に目に見える存在についても、そのイデアがあるとしました。だから「犬のイデア」(完全な犬)や「猫のイデア」があるということになります。

プラトンの弟子のアリストテレスは、このアイデアの存在を否定しました。実際に存在するのは、目に見える個々のものだけだ、と。つまり、ミーやミケなどの猫は存在するが、猫のアイデアなんてないという立場です。こういうやりとりを見て、ある人たちはアリストテレスはプラトンを否定したと考えました。しかし、実はアリストテレスの見解はプラトンを根本的に否定したものではないのです。

と言うのは、アリストテレスは、確かにアイデアというものがどこかの別世界に存在するということが否定しましたが、「猫を猫にしているもの」があることは否定しませんでした。そうして、そういう「ものそのもの」を、形相(けいそう)と呼び、実際に存在しているものの中にあるとしたのです。つまり、たとえば、一匹一匹の猫は、「猫」の形相を受けることによって、存在しているのだ。その形相を受け受皿のようなものが「質料(しつりょう)」で、この質料が形相を分けているのだと考えるのです。質料は材料のようなもので、例えば粘土で豚を作るとしましょう。粘土が質料、豚の形が形相です。

ところで、豚の粘土細工を見せて、「これは何か」と問うと、「豚です」と答えるが、「粘土です」とは答えませんよね。それは「そのものが何であるか」と決定するのは、形相(形)であって、材料(質料)ではないことを示しています。だから、猫が猫であるのは、「猫の形相」を持っているからだと言うのです。

ということで、アリストテレスはプラトンを全面的に否定したのではなく、プラトンのアイデアを実際に存在するものの内部に取り込むという仕方で、修正を加えたというほうが正しいでしょう。ラファエロの有名な絵、『アテネの学堂』の中心にこの二人が描かれていて、プラトンは右手で空を指し、アリストテレスは地上を指しているのは、このことを上手に表していると思います。



しかし、おそらくみんなにはこの形相とか質料とかいう考えはピンと来ないでしょう。現代の普通の人、ものはそれぞれ独立して存在するだけで、あるものをそのものにしていないもの(猫を猫にしているもの)なんて、考える必要がないと考えています。しかし、ここで考えて欲しいことがあります。

それは、私たちは周囲の世界を見て、そこにあるたくさんものを見て、一つ一つに別々の名前をつけるのではなく、「種類」に分けて整理します。どうも、世界に存在する物はばらばらではなく、何かグループにまとまっているようなのです。たとえば、「無生物と生物」、「動物と植物」、「犬と猫」とかいうふうに。でもこういうふうに存在するものをグループにまとめることは、どうして



できるのでしょうか。実際にいる多くの犬の間に何か共通するものがあるからでしょうか。もしあるならそれは何なのでしょう。それとも本当は何も共通するものはないのだが、形が似ているので、便利さのために、「犬とか猫とか」の名前をつけているだけなのでしょう。実はこの問題はヨーロッパの中世に「普遍論争」と呼ばれた難問で、簡単ではありません。でも、この形相と深い関係があります。次の機会に説明を試みたいと思います。今日はこのへんで。期末試験、頑張ってください。